九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

『瓶詰地獄』 : 瓶を投げ込む行動の意味

山根, 祥子
恵州学院外国語学院 : 講師

https://doi.org/10.15017/1909540

出版情報：Comparatio. 21, pp.70-76, 2017-12-28. Society of Comparative Cultural Studies, Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

『瓶詰地獄』―瓶を投げ込む行動の意味―

山根　祥子

一、はじめに

夢野久作は一九二八年に雑誌『猟奇』に短編小説「瓶詰の地獄」を発表した。その後、一九二九年に『日本探偵小説全集　第十一篇　夢野久作集』(改造社)に同小説が収録された際には漢字に久作独自のルビを振るなど、手を加えたほか、内容も改稿している。また、小説のタイトルを『瓶詰地獄』へと改題したのは一九三三年に単行本として出版された『瓶詰地獄』(春陽堂)からであり、この際にも内容をわずかに修正している。(注一)

『瓶詰地獄』の評価は高く、大下宇陀児が「瓶詰地獄を君の最高作品だぞといったら、どんな顔をすることだろう。(中略)瓶詰地獄は彼の名作だというレッテルが貼られてしまった」(注二)と書いているように「久作文学中、屈指の名品」(注三)とされるのが常だ。

久作の『瓶詰地獄』に関する先行研究は主に由良君美の「自然状態と脳髄地獄―夢野久作ノオト」(『現代詩帖』思潮社、一九七〇年五月。『夢野久作の世界』沖積舎、一九九一年十一月、所収)に始まり、江藤正顕「「瓶詰の地獄」論　夢野久作における〈猟奇〉的方法」(『敍説Ⅱ　三号』花書院、二〇〇二年一月)、伊藤里和「漂流するユートピア―『瓶詰地獄』論―」(『日本女子大学大学院文学研究科紀要　第十三号』二〇〇七年三月)、「『瓶詰地獄』―想像を孕む空隙」(『夢想の深淵　夢野久作論』沖積舎、二〇一二年九月)、小金沢透「夢野久作「瓶詰地獄」論―〈ずれ〉るコミュニケーション、その配列―」(『中央大学国文　五三』中央大学国文学会、二〇一〇年三月)などがあり、手紙の順序などのトリッキーな構成やアダムとイブといった聖書のモチーフ、近親相姦に言及しているものが多い。

また、手紙や瓶を海へ流すという構想についても、伊藤里和が「『瓶詰地獄』―想像を孕む空隙」の中で久作自身が漂流する瓶を拾った経験が題材となっていることを明らかにしているものの(注四)、瓶を投げ入れる行為が三度も行われ、その行動原因が違うことは言及されていない。

そこで本稿では夢野久作の『瓶詰地獄』の中の「瓶を投げ入れる」という行為について行動分析学的アプローチを用いて考察し、三本の瓶を投げ入れた兄妹の行動の原因の違いから瓶の内容を再考したいと思う。

二、瓶を投げ込む行動の原因の違い

『瓶詰地獄』の構成は、「海洋研究所御中」(七頁)の書簡一通と、末尾に「哀しき二人より」(九頁)「太郎記す」(一九頁)「市川太郎　イチカワアヤコ」(一九頁)と記された、「××島」(七頁)に漂着した「樹脂封蠟附きの麦酒(ビール)瓶三個」(七頁)の内容とされる、合わせて四つの書簡からなる。小説を構成する瓶の内容の順番と投げ入れられた瓶の順序は異なり、明確な答えはない。

しかし、第一の瓶の内容に「私たちが一番はじめに出した、ビー

ル瓶の手紙を御覧になって、助けに来て下すったに違いありませぬ」（八頁）とあり、第二の瓶の内容に「私たちは、それから、お父様とお母様にお手紙を書いて大切なビール瓶の中の一本に入れて、シッカリと樹脂（やに）で封じて、二人で何遍も何遍も接吻（くちづけ）をしてから海の中に投げ込みました」（一二頁）とあること、そして、「私たちが持っていたものは（中略）水を入れた三本のビール瓶」（一一頁）とあり、瓶は三本しかなかったことを合わせて考えると、彼らが初めて投げ入れた瓶は、小説の最後に提示されている「第三の瓶」（以下「第三の瓶」をA、「第二の瓶」をB、「第一の瓶」をCとする。）であることが推測できる。

まず、このAの瓶を投げ込んだ「行動」について考える前に、Aの瓶の内容について簡単に触れておこう。瓶の内容は漢字交じりのカタカナで書かれ、両親に宛て、無事を知らせ、助けを求めるものである。使われている漢字は「父・母・兄」と「市川太郎」という署名だけである。妹の名前が「イチカワアヤコ」と全てカタカナで書かれていることから、署名は兄妹それぞれが書き、手紙文は「ボクタチ」とあることからも、兄の太郎が書いたものと推測できる。

では、Aの瓶を投げ込んだ「行動」について、行動分析学に基づいて考えてみたい。行動分析学的に行動の原因を考える時、最も重要なのは行動が起こっている「現在の環境要因」であり、「行動随伴性(behavioral contingency)」と言われる、行動のすぐ後、あるいは行動と同時に起こる状況の変化と行動との関係である。（注五）

Aの瓶を投げ入れた結果、どのようなことが起こったか。第一の瓶に「私たちが一番はじめに出した、ビール瓶の手紙を御覧になって、助けに来て下すったに違いありませぬ」（八頁）とあるが、海洋研究所に届いた「樹脂封蠟附きの麦酒（ビール）瓶」（七頁）はいずれも「封瓶」のまま海洋研究所に送られているので、Aの瓶を投げ入れた結果、助けが来たという図式は成り立たない。

伊藤里和が「宛先へ届くことが期待できない、予め到達不可能性を伴った手紙である」（注六）と指摘しているように、Aの瓶が両親へ届き、助けが来る可能性は限りなくゼロに近い。それゆえ、「Aの瓶を投げ込む」という行動の前後は次のように変化はない。

助けを待つ→Aの瓶を投げ込む→助けを待つ

行動しても何も起こらなければ行動が強化されないため、強化随伴性は無くなり「消去」が起こる。（注七）つまり、助けを呼んでも助けが来ず、「助けを待つ」という状態は変わらないため、助けを呼ぶために瓶を投げ入れることはしなくなるのだ。

あくまでもこれは小説の中の話であるため、実際にそれを立証する実験を行うことは難しいのだが、投げ入れる「麦酒瓶」が三個しかないこと、Aの瓶を投げ入れてから、Bの瓶を投げ入れるまでかなりの年数が経っていることなどからも、B、Cの瓶を投げ入れる「行動」は、Aの瓶を投げ入れた時と行動の原因が異なっていると言えるのではないだろうか。

他の瓶の内容からも、二人が島からの脱出を試みた記述は一切な

く、誰かが助けに来てくれた時のために「神様の足凳の一番高い処へ、長い棒切れを樹てて、いつも何かしら、青い木の葉を吊」（一二頁）るす程度の事しかしていない。「この小さな、緑色に繁茂り栄えた島の中には、稀に居る大きな蟻のほかに、私たちを憂患す禽、獣、昆虫は一匹も居ませんでした。（中略）二人のために、余るほどの豊饒な食物が、みちみちておりました」（一一頁）とあるように、外敵もなく食べ物も豊かな島の中で彼らが作ったものは精々壊れたボートで作った「小舎」（一一頁）と「小さな倉庫」（一二頁）などの住居であり、二人はロビンソン・クルーソーのような建設者ではなく、正に聖書の中のアダムとイブのような「ヤバン人のように裸体」（一二頁）で過ごす「楽園」の住人であった。

次に、助けを求める以外の瓶を投げ込む意味を考えていきたい。遭難した二人の島での暮らしぶりを垣間見ることのできるBの瓶の内容は、太郎による独白ともいえるもので、アヤ子への許されない愛欲と葛藤する様子が描かれている。

そして、Bの瓶はAの瓶とは異なり、明確な宛先はないものの「あ。隠微たるに鏖たまう神様よ」（一〇頁）で始まり、「神様。神様。あなたはなぜ私たち二人を、一思いに屠殺して下さらないのですか……。」（一九頁）で終わっていることから、神に宛てたものと考えてよいだろう。

けれども、ここでは神の「不在」によって聖書のような「楽園追放」は起こらない。どんな罪を犯そうとも、罰を受け楽園を追放されないばかりか、島から出て行くことすら出来ないのである。

太郎は近親相姦を犯す前に、自らの死を願い、神の「燃ゆる閃電」（一五頁）に打たれることを願うも、何も起こらず、自分で崖から飛び降りることもできず、助けが来た時の目印としていた「神様の足凳の一番高い処」にある棒切れを引き倒し、「神様とも、お父様とも、お母様とも、先生とも思って」（一二頁）いる聖書を焼くという暴挙にでる。しかし、「私が聖書を焼いた罰なのでしょう」（一八頁）とあるように結局は神の存在を恐れている。そして、「これだけの虐遇と迫害に会いながら、なおも神様の禁責を恐れている私たちのまごころを、この瓶に封じこめて」（一八頁）瓶を海に投げ入れる。

これは信仰を棄てたと解釈すべきなのだろうか。もしそうならば、「Bの瓶を投げ込む」という行動の前後は次のようなものになる。

神を恐れている→Bの瓶を投げ込む→神を恐れていない

しかし、Cの瓶の内容には「それは、私たち二人にとって、最後の審判の日の瓮よりも怖ろしい響で御座いました。私たちの前で天と地が裂けて、神様のお眼の光りと、地獄の火焔が一時に閃めき出たように思われました」(八頁)、「神様からも人間からも救われ得ぬ哀しき二人より」(九頁)と、神の存在を意識した表現があることから、信仰を棄てようにも棄てきれなかったと考える方が自然だろう。由良君美は「自然状態と脳髄地獄—夢野久作ノオト」の中で「聖書を焼いた彼らにとって、もはや罪の基準は消滅していた筈である」(注八)としているが、そう簡単に捨てられるとは思えない。なぜなら、二人にとって聖書は「神様とも、お父様とも、お母様とも、先生とも思って」(一二頁)いるものであり、例えそれを焼き棄てたとしてもそれらの存在を忘れることはできない。むしろ、忘れようとすればするほど、かえってそれが強く意識されることとなるのではないだろうか。

では、信仰を棄ててはいない場合の「Bの瓶を投げ込む」という行動の前後を見ると次のようなものになる。

罪を抱えている→Bの瓶を投げ込む→罪を抱えていない

つまり、本来ならば司祭を通じて犯した罪を神に言い表す「告解」や「赦しの秘跡」の行為の代わりとして、瓶を投げ入れているのである。樹脂で密封した瓶はここでは口外しない神父の役割を果たしている。ただし、この「罪を抱えていない」という状態は一過性のものであり、神を恐れている太郎にとって一時の気休めにしかならないであろうことは想像に難くない。

「私とおんなじ苦しみに囚われているアヤ子の、なやましい瞳が、神様のような悲しみと悪魔のようなホホエミとを別々に籠めて、いつまでもいつまでも私を、ジイッと見つめているのです」(一八頁)とあるように、太郎がアヤ子の中に神と悪魔の両方を見ているのだから、例え、一時悪魔の誘惑に負け、近親相姦の罪を犯したとしても、再びアヤ子の瞳に映る神の存在に怯えることになるだろう。アンビバレントな感情はその大きさの比重に変化はあれども、常に太郎の中に存在する。

小金沢透が、二人が恐れていたのは「約十年という歳月培われた聖書による道徳観念ではなく、二人の内で育てられた外部への空想(内部内外部の社会)の視線である」(注九)とし、Bの瓶の「万一、そんな事をし出かしたアトで、救いの舟が来たらどうしよう……」(一四頁)という箇所を指摘しているように、二人にとって聖書は「神様とも、お父様とも、お母様とも、先生とも思って」(一二頁)いるものなのだから、キリスト教の聖典といった一義的なものではなく、いくつかの役割を兼ねている。太郎にとって、神を恐れるこ

とは、両親、果ては二人がかつて所属していた懐かしい社会をも恐れることであり、裏を返せば、近親相姦が誰からも許されぬ罪であることを知っていたことになる。島の外では決して許されぬ存在である二人にとって、神の存在を恐れながらも神が不在のこの地獄のような「楽園」が唯一の居場所であった。

最後に、「Cの瓶を投げ込む」行動について考えてみたい。Cの瓶の内容は「ああ……この離れ島に、救いの舟がとうとう来ました。大きな二本のエントツの舟から、ボートが二艘、荒波の上におろされました。舟の上から、それを見送っている人々の中にまじって、私たちのお父さまや、お母さまと思われる、なつかしいお姿が見えます」(八頁)とあるように、島に救いの船が来たことにより、近親相姦の罪が白日の下にさらされると悲観した二人が死を決意する内容で、遺書ともいえる。

Cの瓶は本来ならば投げ入れる必要のないものである。テクストに「そうして、あとには、この手紙を詰めたビール瓶が一本浮いているのを、ボートに乗っている人々が見つけて、拾い上げて下さるでしょう」(九頁)とあるが、実際に救いの船が来たのであれば、この手紙は遺書であり、見つけてもらわねばならないものなのだから、二人が飛び降りる高い崖へ置いておくのが自然だ。ましてや「荒波」なのだから、海に投げ込んでしまえば、波にのまれて見えなくなってしまう可能性が高い。

この救出を巡っては由良君美も「おそらく幻影である」(注一〇)とし、四方田犬彦も次のように助けが来たのは太郎らの妄想で、実際に助けが来たわけではないと断言している。

誤解がないように註釈を添えておくと、この船はどこまでも彼らの妄想が作りあげたものであって、けっして最初の瓶詰の手紙が功を奏した結果ではない。プロローグで明らかなように、三通の手紙は同時に発見され、届けられているためである。(注一一)

確かにこの物語のトリッキーなところではあるのだが、「Cの瓶を投げ込む」という行動に焦点を当て、その前後を考えると違ったものが見えてくる。

彼らは、助けが来たから瓶を投げ込む訳ではない。瓶の中の手紙が遺書なのであれば、先述したように確実に人の目に触れるようにしておかなければならない。船が妄想であろうが現実であろうが、「Cの瓶を投げ込む」行動の前後は次のようなものとなる。

遺書を持っている→Cの瓶を投げ込む→遺書を持っていない

大事なのは二人の手元に遺書はないということである。遺書は基本的には自分たちの死後のために残すものである。それを読む人の存在を意識しなければ恐らく書かないだろう。たとえ両親に直接届かなくとも、それを見つけた第三者によって開封され、自分たちのことを知ってもらえる可能性はある。そうなると瓶の内容に反して意図的に投げ入れた可能性も否定できない。

つまり、このCの瓶は二人の存在証明でもあるのだ。Aの瓶の内

容は助けを求めた、両親宛てのもの。Bの瓶は自らの罪を告白した、神に宛てたもの。Cの瓶は自分たちの生きた証として、自分たち以外の第三者に宛てたもの。そう考えることができるのではないだろうか。

このように、瓶を投げ込むという行為をその行動随伴性と併せてみたとき、その行動の原因の違いからテクストの読みの可能性は広がる。

三、おわりに

ここまでA・B・Cそれぞれの瓶を投げ込む行動の原因の違いを明らかにしつつ、瓶の内容を再考してきたが、もう一つ忘れてはいけないのは三本の瓶とは対照的な海洋研究所宛ての仰々しい手紙の存在である。短編小説『瓶詰地獄』は、書簡体小説の形をとっており、読者は一通目の仰々しい手紙で漂流物として届けられたことを知り、続いて届けられた三本の瓶の内容が時系列順不同で提示される。

読者は瓶が拾われ、研究所宛てに送られたということはわかっても、そこでは第三者の感情はすべて排除され、事務的で機械じみた行為しか読み取ることができない。この対照的な冷たい無機質さが、一層瓶の中の暑い南国の人間の肉と欲の地獄を引き立てる。いや、送られたとは限らない。確かなことは瓶が拾われたということだけである。伊藤里和は一通目の役所の作成した文章の空隙から次のような推測を立てている。

> 一つの可能性として考えられるのは、文書を作成したものの、提出を保留にしている場合である。文書は何らかの理由により、まだ送付されてはいない。(中略)読者は、どこにも届かず、封の開けられていない手紙の中身を、作品を通じて覗き見ている、ということになろう。(注一二)

確かに、この『瓶詰地獄』には手紙を書いた人物は存在する。第一の瓶から第三の瓶はもちろん、海洋研究所宛ての手紙もそれを書いた人物は確かにいる。しかし、それ以外の人物は「不在」なのである。三つの瓶が開封されたとはどこにも書いていないし、研究所宛ての書簡もそれが研究所に届けられ、開封されたとは書いていない。先行研究では「鉛筆」の矛盾から手紙の書かれた順序の矛盾を指摘するものもあるが(注一三)、例えそれが鉛筆も尽き、かすれて文字になっていないものだとしても神の目をもってすればそこに込められた「独白」も「遺言」も知ることは可能である。

本稿では「瓶を投げ込む」という行動に注目してその行動の原因や意味を考えてきたが、行動分析学では言語も行動ととらえ、非言語行動と同じように「行動随伴性によって分析できる対象」と考える。その際には聞き手、つまり、読者の行動も併せて分析する必要があるのだが(注一四)、伊藤里和の「本作の物語は初めからそこにあるのではなく、読者の想像が介入して初めて創り出されるということができよう」(注一五)という指摘が正にそれである。

読者に提示された事務的で無機質な役所からの通知と神のなせる業でもって知ることのできた三つの瓶の中身を、欠落を読者は自分

の想像で補いながら読んでいくのだから、幾通りの読み方が出来、『瓶詰地獄』は読者が読みながら推理する探偵小説のような一面を持った作品でもある。

瓶を開けてもいないのに、瓶の中に入っているであろう、南国特有の甘く温かい空気とともにどろりと二人の世界があふれ出し、あっという間に肥大し、エロティックでグロテスクな世界を垣間見せる。由良君美は「脳髄地獄」と銘打ったが、なるほど、これは読者の脳にも侵食する甘美な地獄絵図だ。タイトルも初出の「瓶詰の地獄」と『瓶詰地獄』を比べると、『瓶詰地獄』の方が視覚的にも閉塞感があり、開けてもいない封瓶の様子がぎっちりと漢字四字で表れているように見えてくる。

本稿の『瓶詰地獄』のテクストの引用は夢野久作『夢野久作全集8』(筑摩書房、二〇〇三年五月、七～一九頁)からのものである。

「注」

一、夢野久作『夢野久作全集8』筑摩書房、二〇〇三年五月、四四二頁。

二、大下宇陀児「詩人・夢野久作」『宝石』一九六三年五月、西原和海編『夢野久作の世界』沖積舎、一九九一年十一月、七〇頁。

三、前掲注一に同じ、四四二頁。

四、伊藤里和『夢想の深淵 夢野久作論』沖積舎、二〇一二年九月、一〇七頁。

五、杉山尚子『行動分析学入門―ヒトの行動の思いがけない理由』集英社、二〇一四年五月、三三～三四頁。

六、前掲注四に同じ、一二一頁。

七、前掲注五に同じ、六六頁。

八、由良君美「自然状態と脳髄地獄―夢野久作ノオト」『現代詩手帖一三(五)』思潮社、一九七〇年五月、二六頁。

九、小金沢透「夢野久作「瓶詰地獄」論―〈ずれ〉るコミュニケーション、その配列―」『中央大学国文 五三』中央大学国文学会、二〇一〇年三月、六五頁。

一〇、前掲注八に同じ、二七頁。

一一、前掲注一に同じ、四三八頁。

一二、前掲注四に同じ、一二三頁。

一三、瓶の順序を巡って伊藤里和は、小舎を全焼するほどの火事にもかかわらず、焼失した後「第一の瓶の内容」が書かれたとされる矛盾や「第二の瓶の内容」に「鉛筆がなくなりかけていますから、もうあまり長く書かれません」とあるにもかかわらず「第一の瓶の内容」が書かれている矛盾を指摘し、『瓶詰地獄』の「決定不可能性」を指摘している。(前掲注四に同じ、一一七～一一八頁。)

一四、前掲注五に同じ、一五二頁。

一五、前掲注四に同じ、一一六頁。